

3-9. 東近江市市民環境部森と水政策課（滋賀県東近江市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 115,270人（H28.2/1現在）

【面積】 約388k㎡（滋賀県の総面積の約9.7%、県内で5番目に大きな市である。）

【地勢】

滋賀県の南東部に位置し、北は彦根市、愛荘町、多賀町、南は竜王町、日野町、甲賀市、西は近江八幡市と隣接しており、東は三重県との県境となっている。地形は、東西に細長く、東に鈴鹿山系、西に琵琶湖があり、愛知川が市域に貫流している。流域には、平地や丘陵地が広がり、田園地帯を形成している。また、市域の約56%を森林が占めるなど、緑豊かな自然環境が多いのも本市の特徴である。

【気候】

気温は、年平均15度前後、年間降水量は1,700mm前後で、全般的に穏やかな気候風土である。

【歴史】

古代飛鳥時代の歌人である、額田王と大海人王子の相聞歌の舞台となった蒲生野や、聖徳太子由来のお寺など多数の古刹が点在している。中世以降は交通の要衝として栄え、近世には近江商人が活躍した地である。このように様々な地域と交流を重ねることにより、数多くの文化が醸成されてきた。近代に入り、「明治の大合併」、「昭和の大合併」と市町村の度重なる町村の再編を繰り返し、平成17年2月11日「東近江市」が誕生する。当時の合併は、1市4町（八日市市・永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町）によるものであった。その後、平成18年1月1日に東近江市は蒲生町及び能登川町と再合併をへ、現在の「東近江市」が形成されるのである。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

鈴鹿国定公園である鈴鹿山脈から琵琶湖までが一つの水系でつながった東近江市として、その地域資源を生かした地域活性化策にこれまでも取り組んできた。農業体験や歴史に触れる街歩きなど、地域の団体を中心に企画され始め、今年度から、アウトドアの民間会社と連携し、山から湖までの自然資源の素晴らしさを宣伝している。しかし、一つのまちとしてトータルでエコツアーを商品化し、交流人口を増やすところには至っていない。

当地域には次のような課題がある。

- ・ あるものを生かし、自然を毀損しないエコツーリズムを正しく理解できている団体が少ない。
- ・ エコツーリズムを企画し、推進する組織がない。
- ・ 鈴鹿山脈から琵琶湖まで、広域の魅力を十分伝える手立てがない。
- ・ 各分野の団体間でエコツアーに対する意識に違いがある。
- ・ 地域を案内できるガイドが不足している。

上記のような課題を解決するため、エコツーリズム推進アドバイザー派遣を利用させていただき、関係者らの意識の共有を図るとともに、推進体制の構築につなげたい。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 28 年 2 月 3 日 (水) 15:00~17:30
場 所	東近江市役所本館 302 会議室
アドバイザー	株式会社ツーリズムワールド 代表取締役 高梨 洋一郎氏
参加者	計 27 名
スケジュール・方法	講話、質疑応答、視察

(3) アドバイスの内容（議事録）

基調講演：「東近江市エコツーリズムが目指すもの

～交流・滞在型観光地づくりへの挑戦～

1) 高梨先生自己紹介

2) エコツーリズムの概要

- ・ エコツーリズムは、珍しい生物や文化を観察したり体験するツアーである「エコツアー」や自然文化体験活動などを内包する理念や概念のことである。
- ・ 地域の「観光資源」を掘り起こし、持続可能な活用を通じて、域内にお金が落ちる仕組みを構築し、「地域振興」を行い、「環境保全」へ繋げていき、さらに資源価値を高めていくという一連の流れをつくるのが「エコツーリズム」である。
- ・ 自然保護区や国立公園の保護、保全を目的にし、資金の獲得手段の一環として生まれた経済、社会運動が遠因である。
- ・ いかに域内にお金を落としてもらえらる仕組みをつくるかがポイントである。ガラパゴス諸島では、島民に経済的メリットを発生させる仕組みを構築したことにより、希少な動植物の乱獲に歯止めがかかった。

3) 日本型エコツーリズムの推奨

- ・ 「保全活動実践型」は、里地里山の身近な自然、地域の産業、生活文化を活用したエコツーリズムであるが、近年注目を集めてきている。
- ・ 地域資源を掘り起こし活用するという地域住民参加型であるのが特徴。

4) エコツーリズムの手法

- ・ 地域コーディネーターを中核に、ステークホルダー間の合意形成を図り、推進体制を構築する。1つの団体や主体が担うのではなく、地域内から多様な賛同者や協力者を募り、地域ぐるみで実施していく。

- ・ 地域の宝を探し、活用する方法を模索する。
- ・ 地域の魅力や資源を熟知している人は一定数存在するが、その情報を発信し続けられるかが課題としてある。ガイドを養成していくことは重要となる。
- ・ ストーリー性を意識したプログラムを作成し、ターゲット別のマーケティングを実施するなど戦略的に企画、運営していく。

5) 東近江版エコツーリズム

- ・ 行政から事業者、市民を含めた地域ぐるみによるエコツーリズムの推進による東近江里山ツアーを推進する。
- ・ 東近江エコツーリズムの主旨や効果を明確にし、全体構想を策定していく。
- ・ 導入にあたり、地域の資源探しをしていく必要がある。
 - ①「自然」、「歴史・文化」、「産業」など、キーワードごとに資源を分類する「資源マトリクス」の作成をする。
 - ②資源の分布状況をマッピング化し、分布状況を基にゾーニング化する。
 - ③東近江市のフェノロジー（季節暦）を作成する。
- ・ 情報化社会にみあったシステムを構築し、SNS や web を活用した情報発信をすることが肝要。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・ エコツーリズムへの理解、関心が高まり、地域資源を活かした取り組みへの参加意欲が高揚したことが、参加者アンケートから伺える。
- ・ 本市の緑豊かな自然環境や醸成された歴史文化を再認識し、「なにもないところ」という発想から「あるものを大切に、見えにくいものをいかに発見していくか」という発想に転換された。
- ・ 地域の様々な主体が参画し、推進体制の構築が急務であると感じると同時に、市内で活躍されている団体が勉強会に多数参加し関心を示すなど、東近江市には推進体制を構築する基盤ができつつあるのではないかと道筋が見えた。

2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ 推進体制を組織、運営していく上での、エコツーリズムに対する、関係者間の共通認識が芽生えたのではないかと。
- ・ 具体的な手法を、事例を通して学べたことにより、今後の方向性が見えてきた。

3) 今後の取り組み

①参加者や関係者に与えた効果

- ・ これまでにも個々には様々な活動や取り組みが行われていたが、それらを地域でつなぐことで、より魅力的なツアー資源となることを確認できた。

②今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ それぞれの組織が連携して動くことは、これまでになかった魅力付けや、資源の発掘、新しい活用など、今ある資源をさらに有効に利用する（つまり保全する必要性も認識される）という動きに結び付くことが期待される。

③今後の取り組み

- ・ エコツーリズム推進のための協議会の設立に向けて動く予定。

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考になった事例、その感想

1) 参考となった事項

- ・ エコツーリズムは、地域のことを熟知した住民主導で地域の自然や体験を提供できるため、マスツーリズムでは困難な「ホンモノ」を魅せることができること。
- ・ 地域振興と環境保全の両者への起爆剤として機能する可能性を秘めていること。

2) その他感想

- ・ 東近江市は鈴鹿山系から琵琶湖までと非常に豊かな自然環境を有し、歴史文化面でも他に劣ることなく非常に色彩豊かである。この恵まれた環境に本市があることを、気づいている人が何人いるのだろうか。
- ・ 住民自身が地域の資源を探ることにより、本市の魅力を再認識することが重要であることを、今回の講演を契機に、多くの参加者が理解できたのではないかと考える。幸い本市には、自然環境を保全、活用している団体が多数存在する。いかに、巻き込んでいけるかが鍵となるのではないかと講演を通して考えた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

高梨 洋一郎氏 (株式会社ツーリズムワールド 代表取締役)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

滋賀県東近江市は、平成の大合併により平成 17 年から 18 年にかけて旧四日市市を中心に 1 市 6 町が合併して誕生した中規模（人口 11 万 5 千人）の新しい市である。東は琵琶湖に面し東は鈴鹿山脈の山塊を有する 388 km²の広大な面積を有し、中心を名神高速道路が貫く交通の要所でもある。1200 m級の鈴鹿連山に源を発する愛知川が東西の中心部を流れ、豊かな田園地帯を形成している。近江商人発祥の地として有名なところであるばかりでなく、古くからの交通の要所であったため、工業や商業がバランスよく形成され、近年は近畿経済圏のベッドタウンの一部ともなっている。ただ、市制 10 年と若い市であるため観光的な魅力となると統一した総合的な魅力をまだほとんどまとめきれておらず、市では未開発の鈴鹿山塊地域や河川地帯から琵琶湖に繋がる田園地帯を活用した自然文化活用型観光を推進するため、「市民環境部」に「森と水政策課」を新設して官民協働型の新たな観光地づくりをスタートさせている。

②課題

「東近江市観光協会」は既に数十種の体験・ガイド型プログラムを設定して着地型観光の推進を進めているほか、近江商人記念館観光、全国的な運動となり始めている「菜の花プロジェクト」発祥の地としての観光、琵琶湖湖畔におけるカヤックなどのカヤック体験など、古い歴史の舞台を活用した観光から新たなプログラム開発まで、旧市町ごとに相応の観光資源は活用されているが、残念ながら「東近江」としての統一した観光に関するコンセプトは打ち出せていない。併せて、鷹や鷲の渡りの地ともなっている鈴鹿山塊エリアの豊かな自然資源を活用したエコツアーはほとんど手つかずの状態となっている。東近江の自然文化資源の魅力を総合的に再度見直し整理してマーケティングにつなげて行くことと、新たな自然資源として鈴鹿エリアの活用を図ることが、大枠としての課題であると感じた。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ア) 五箇荘の近江商人屋敷
- イ) あいとうエコプラザ菜の花館
- ウ) 道の駅「奥永源寺溪流の里」
- エ) その他、琵琶湖のカヤック体験や愛知川の河川敷。時間の関係で視察できなかったがその他の魅力も少なくない。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ア) 全国に名をはせた近江商人はそれ自体で十分な観光価値を有する。博物館として保全された屋敷をガイドの案内で見学、近江商人の足跡を辿る楽しさがある。
- イ) 菜の花の栽培から活用、再利用にいたる環境循環型産業として全国に広まった「菜の

花プロジェクト」発祥の地。視察旅行で多面的農法についても学べる。

ウ) 旧中学校を再活用した道の駅は、地域住民の生活を支える拠点となっているばかりでなく、鈴鹿自然体験観光のベース基地ともなっている。三重県いなべ市と2011年に石樽トンネル(4158m)で繋がったことにより、自然観察体験型観光の拠点となる鈴鹿山塊は、近畿圏プラス中京圏からのエコツアー客も視野に入れることができるようになった。道の駅はその中心的な存在ともなる。

3) アドバイス（講義等）の概要

新市誕生からまだ10年と日が浅いため、東近江市としての自然・文化資源を活用した交流型観光への本格的な取り組みは、まだ殆ど初期の段階に過ぎない。併せて、各域内（旧市町）に点在する観光資源を「東近江」の統一したコンセプトでマーケティングを展開するには、新たな特徴づけが必要である。豊かな自然環境に恵まれた鈴鹿山塊は、新たなエコツアー型観光を開発するには格好の条件を備えている。

以上のような視点から、今後の観光は、自然や文化資源を活用した交流型観光にあり、そのためには体験学習やガイドの養成を含めたエコツーリズムの「考え方・活かし方」が有効であるとの視点に基づき、エコツーリズム資源の整理（宝探し）と地域ごとの特徴をゾーニングして、マーケティング展開を図ることをアドバイスした。

当面行政が主導してステークホルダー（関係者や団体）との合意形成を図りながら、新たな「東近江のエコツーリズム」の枠組みづくりに着手する必要があると感じた。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

未定

②全体構想策定への意向について

未定

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まずは、基本となる「東近江観光基本構想」の策定からはじめる必要がある。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

小粒ながらエコツーリズム型観光や体験プログラムをしっかりと実施している団体やグループが少なくないことに驚かされた。

ただ、新市の誕生が浅いこともあって、それらステークホルダー間の交流は殆ど行われていない状態と思われ、まずその情報・意見交流の場づくりが第一歩であると感じた。継続的な情報交換や勉強会の実施を是非期待したい。

そのうえで、鈴鹿山塊の自然観察・体験型プログラムの開発や人材の育成を睨んだ計画づくりを進め、近江の里山型エコツーリズムの開発に繋げて行ってほしい。そのことが将来の東近江市の交流型観光のベースとなり、エコツーリズム全体構想策定につながると期待する。